

在り。又三州志髓撰餘考に、田井堡は今云ふ寶幢寺舊跡邊にあり。賊將松田次郎左衛門居す。とあり。飛耳棟梁に云ふ。昔當國尾山の城本源寺の家老松田次郎左衛門は、河北郡の棟梁にして、小立野寶幢寺坂を城郭となし、尾山城の押へに蟠居すと。加邦録には、傳聞に云ふ。本源寺の家老松田次郎左衛門とて、加賀郡の棟梁にて、今寶幢寺揚地より奥村助右衛門居邸、および出羽町へかけて居城となし、本丸は寶幢寺揚地に清水有りて用水となし、松山寺邊二の郭にて、成瀬内藏助屋敷地は三の郭搦手とす。細長き繩張なり。八返道は馬場跡にて、向うの堀にて馬の洗足する用水とす。其の外高垣・椿原・石那坂等の所々に搔上げを構へて、宗徒の者共蟠居也。土民を隨從して我意を振舞ふ。と云へり。按ずるに、右傳説に據れば、奥村の邸跡の地邊より、八坂および材木町成瀬氏邸跡へかけ、田井城の遺跡なる事知られり。

○松田次郎左衛門傳話

加邦録に云ふ。傳聞に云ふ。本源寺の家老松田次郎左衛門は、加賀郡の棟梁にて、土民を隨從して我意を振舞ひける

に、厩川の下米泉村に、須崎兵庫とて石川郡を押領し、本源寺と威勢を争ひ、互に鋒楯度々戦ひ、本源寺方には樋口石浦などの武勇の者多ければ、中々急に打勝ちがたく、須崎もさまざまに秘計を廻らし、一旦和睦をなして、互に直りの嘉儀をとりかはし、其後松田をはじめ米泉の館へ招待して饗應をなしけるに、善盡し美を飾り、妓女を多く出して酒宴を催し、既に數刻に及べり。爰に松田が甥なる石浦主水は、今慈光院の地邊に居城を構へて宗徒の者なりしかど、是もをちの松田に隨行して米泉へ行き共に饗應に預りけるといへども聊か狐疑もなければ、松田と共に沈酔して、何れも淺間しかりし次第なり。其中にも主水は餘り酒にも酔はざりけん、露地へ出で、あなた此方の流れ、庭地の風景をも打ながめ散歩せし處、とある藪陰に討手の者と覺しくて、退兵數人隠れ居たり。あはやとおもひ、松田に告げ知らしめんと押動かしけれど、前後も知らず酔ひ臥したり。主水致し方なく、其の身一人遁れ出でんと、地塚の堀を飛び越え、道を尋ねてやう／＼に石浦城へ逃げ歸りけるに、伯父の松田四郎左衛門は流石の者なれど、前後も知ら

ず沈酔しければ、敵の爲にやす／＼と討たれ、郎等手の者ども必死と成りて働くといへども、多勢に無勢叶ひ難く、悉く討死なしたりけり。松田が馬捕三右衛門といふもの一人相働き、敵一人討取りて其の身も淺手を負ひたりしかど、主の松田が馬に打乗りて、飛ぶが如くに駈歸り、跡をかへり見れば、須崎が多勢二手に成りて旌旗天を掩ふが如く、時を移さず押寄せたり。三右衛門は石浦が方へ立寄り、爾々の由を告げ知らせ、さて主の城へ立歸り、留主居の者へ主人の有さまを語り、敵はや押寄せ来る也、何れも防戦の下知有之、後詰を待ち給ふべきやといへども、勇激の者共は皆米泉にて討ちとられ、石浦の城もはや落城したりけん、煙火天を掠め、鬨聲は耳もとに聞えければ、田井の城に居ける者逆は僅に十人許、家僕共は皆逃失せて、中々逆も一方をも防禦すへき事もならず。松田が妻女も詮方なく、此上は尋常に自害して、恨を泉下に報ぜん、奥に入りて支度するを、三右衛門少し存寄るかたも侍り候へば、一先づ越中の方へ御立退きありて時節を待ち、若子をも世に立て給へかしと諫めて、越中へ立退かせ、荒木といふ所

に隠し置く。後に荒木六兵衛と號し、利家卿越中へ發向し給ふ時召出され、千石の采地を賜はり、于今子孫繁昌す。其節松田が家に傳はれる聖徳太子の尊像あり。かたみにも見よとて、松田妻女より三右衛門にあたへしを、後に田井村の道場に安置す。靈驗揭焉とて、毎歲二月廿二日にて今に至り參詣人群をなしたり。此尊像は、もとは本願寺の寶藏にありしを、何れの頃にか松田に給はりしと也。とあり。飛耳棟梁には、松田四郎左衛門は本源寺の家老にて、河北郡の棟梁、小立野寶幢寺坂を城郭となし、尾山城の押へに蟠居す。其頃河の南米泉郷に、須崎兵庫とて、石川郡の押領使として數年尾山本源寺と威を争ひ、折を伺ひ河北を襲ひ取らんと巧み謀る事歳久し。或時間隙の計策を廻らし、和睦せんと、松田をば米泉の館へ招き兵を伏せ置きけるに、松田是を不曉して和睦に心とけ、米泉に至りて互に悦を述べ、酒宴數刻に及び、主從沈酔して前後を知らず。爰に松田が甥石浦主水といふもの、用所有りて露地へ出でたりしに、藪中に伏兵數名居たり。驚き、扱は敵の謀計に落されたりと、堀を越え道を尋ねて石浦の砦へ逃歸る。松田